九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『竹斎』考

入口，敦志
九州大学大学院（博士課程）

https://doi.org/10.15017/11913

出版情報：語文研究. 70, pp.1-13, 1990-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『竹斎』考

入口敦志

従来の『竹斎』研究において、古活字本と整版本との本文の異同を重要視しているものは多くはない。井浦芳信氏が最初に『竹斎』の本文の流動に着目し、両者の性格の違いを論じたのは、昭和十七年、『近世国文學』（第一輯）に載った「古活字本「竹斎」の研究」においてであり、決して新しいことではなく、むしろ『竹斎』研究の最初の段階で既に本文の異同が問題となっていたといってよいであろう。しかし、その後それを承けるかたちで研究を進めていったものは多くはないのである。二三の例外をのぞいた多くの『竹斎』論は、古活字本に基づいてなされるのが普通[1]であるが、実際には整版本をも参照しつつ、両者を一緒にしたかたちで論じられている。

たしかに、整版本は古活字本を改訂増補したものであり、両者を全く別のものといってしまうには抵抗を感じる。その点からいえば整版本を参照しつつ、古活字本に基づいて『竹斎』を論じるというのももっともなことである。しかし、その両者の間にすくなからぬ相違があることも事実であり、両者を混同してしまうことによって重要なことが見落とされてしまうといった問題も生じるであろう。

そこで本稿では、井浦氏によって提唱された古活字本と整版本との比較検討という方法に立ち帰って、両版本の間に横たわる問題について考えてみたい。

一

井浦氏の後を承けて、古活字・整版の両版本を比較するという方法をとって最初に目ざましい成果をあげたのは松田修氏[2]であろう。松田氏は、古活字本と整版本との間の、特に能役者の名寄せの異同に着目して、古活字本の成立が元和七年から九年にかけての間、最初の整版本の成立が寛永三年から十一・二年までの間であるという考えを提示し、これは現在では定説となっている。本稿においても成立年代についてはこの説にしたがっておく。

次に同様の方法によって『竹斎』を論じたのは矢野公和氏[3]である。矢野氏は古活字本から整版本への改訂増補に、『竹斎』の作者の置かれた立場の反映を見いだそうと試みている。それは、矢野氏の言によれば、

古写本『竹斎東下』と整版本との相違点[4]を分析することによっ

て、作者の託したものが何であったのかを探ることから始めたいと思う。

という意図のもとに、『竹斎』においては、

批判を内に秘めた竹斎像が、整版本に於いて最も洗練された形を持って登場する

という結論を導き出している。その論証の方法は相当の説得力を備えているものといえよう。しかし、矢野氏が根幹にかかわる所で見落としている問題、あるいは読みまちがっている個所がある。それらのことは、矢野氏だけではなく今までの『竹斎』研究においても看過される傾向にあったことなのである。つまり、矢野氏の論の問題点を検討することが、そのまま現在までの『竹斎』論の問題点を検討することになると考えられる。そこで、ここでは矢野氏の論に即してもう少し詳しく検討し、そこにある問題点を掘り起こしておきたい。

矢野氏は

批判を内に秘めた竹斎像が、整版本に於いて最も洗練された形を持って登場のするのは、既に見た通りであるが、そのことは、自虐によって世の中を諷刺するというスタイルが、整版本に於いて突如として生み出されたということを意味しはしない。京内参りの後に付加された二つのエピソードと数ヶ所の文章の異同を除けば、細かい字句の相違は見られるもののストーリー的には何ら異なる所のない古写本に、そうした発想が潜められていなかったと考える方がむしろ不自然である。恐らくそれは、仮に萌芽的なものであったにしろ、当初からこの作品に備わっていたものであると考えられる。

と言っている。たしかに、「二つのエピソードと数ヶ所の文章の異同を除けば、」「ストーリー的には何ら異なる所」はないし、多くの『竹斎』論もこのような考え方に基づいて、古活字本を用いているのであろう。しかし、ストーリーに直接は関わってこない小さな異同も、矢野氏が論証に使用している異同と同じ程度には重要であるし、更に、もっと些末な、小さな異同にも、というよりむしろ、些末な異同であるからこそ重要な問題を孕んでいるということもあるのではないか。このように、矢野氏はまだ問題になりうる異同を見過ごしているのではないかというのが第一の問題点であり、このような小さな異同を検討してみると、矢野氏の『竹斎』に対する世の中への諷刺という読み方も見直さなければならないのではないかと考えられる。

第二点は、古活字本の作者と整版本の改訂増補者の同一視ということである。これも矢野氏に限らず、今までの『竹斎』研究にあてはまることであるが、積極的に同一の人物だとしないまでも、その点については言明を避けたままにして論じているものが多い。

『竹斎』の作者については、笹野堅氏が指摘していた磯田道冶という説を[5]、野間光辰氏が富山道冶と訂正して[6]以来、富山道冶説が一般的になっている。富山道冶は天正二年に伊勢に生まれ、曲直瀬玄朔に医学を学んだあと、江戸に開業し、寛永十一年に五十一歳で没したという。[7]さきに紹介した松田修氏の推定によれば整版本の成立の下限が寛永十二年ということなので、道冶自身が整版本出版の際に手を加えたと考えることも可能である。おそらく、このように作者と目される人物の生存年代と整版本がほぼ符合しているために、古活字本の作者と整版本の改作者とが同一人物かどうかという問題

が見過ごされがちだったのであろう。

しかし、現在ではあまり問題にはならないが、『竹斎』の作者については富山道治説以前にいくつかの説が存在している。その作者説をみておきたい。

もっとも早いものは、寛文十二年の『竹斎はなし』上の第十三話「竹斎俗人の時山本又右衛門という事」という一つの咄である。咄の内容は、名前を問われて名字を忘れた竹斎が、かえるが水の中にどんぶりと飛び込むのをみて、自分の名前をどんぶり又右衛門と答え、さらにその文字を聞かれて「かいる水へ入とかく」と返答するという笑い咄である。この咄は、どんぶり又右衛門咄を竹斎に仮託して『竹斎はなし』の一編として加えられた可能性もあり、これをもってすぐに『竹斎』の作者と言うわけにはいかないが、極早い時期にこのような咄が成立していることは注目しておいてよいだろう。

次は、貞享二年刊の円瓢子という人物の手になる『竹斎療治之評判』である。ここには具体的な名前は出てこないのだが、作者がどのような人物であったかについての記述があり、それは次のようなものである。

療治の品々を見るに、たゞ世常の人とは見えず。されば竹斎といふ名のありての事か、又は実名をかくしての事かと有増しれる人にたづね問ぬれば、いかにも能医者にて、何のなにがしと申したる人といふかたあり。又学文をもよくつとめたる医者にて療治はしかも上手なりしが、すこし思ひよりの下心ありて、此草子書れしと語る人も有。[8]

この記述によれば、貞享二年当時「有増しれる人」のあいだでさえ『竹斎』の作者についてははっきりとはわからずいくつかの説があったようにもみえる。

さらに、中村富平の『弁疑書目録』（宝永六年）では、烏丸光広の著作として『竹斎』があげられている。

このような説があるからといって富山道治説を否定しようというわけではない。ただ、富山道治説以前に、しかも『竹斎』に近い時期にこのような説が行われていたことは無視できないのではないかということなのである。特に『竹斎』そのものに関しての著作である『竹斎療治之評判』において、具体的な人名があがっていないばかりか作者についていくつかの説があったようにみえることは注目すべき点であろう。そこからは、それが古活字本の作者と整版本の改訂者とが別人であったことから生じているとまではいうことが出来ないが、何か作者説を混乱させるような事情が『竹斎』の成立の裏にあるのではないかとも想像されるのである。

いずれにせよ、古活字本の作者と整版本の改訂者とが同一人物であるということを前提にしてしまって論を進めるのは危険であろう。そこで最初に作者と改訂者の問題について考えてみたい。

二

古活字本の作者と整版本の改訂者とが別人ではないかということについて、既に触れているものがある。一つは最初にふれた井浦芳信氏の論文であり、もう一つは松村博司氏の論文[9]である。松村氏のものは、そのことについて論じられているわけではないが、後注の中で整版本の増補について触れた後で、「原作者とともに改訂増補

者に対しても興味が持たれる。」としており、改作者が別人であると考えていることをうかがわせる。

井浦氏は、整版本での改訂を具体的に検討して[10]、

この自由な改変の態度には、或は古活字版の作者―原作者が整版本上梓に際し自から筆を加えたものかと思はせるものがある。

としながらも、最終的には、

畢竟作者を光広以外としても改作は別人の加筆とすべきであらう。

と結論している。井浦氏も結論を出してはいるものの、いま一つはっきりしない。そこで、この点に関して検討してみたい。

田中伸氏は、古活字本と整版本とに、道行文の中にそれぞれ地名の順序を取り違えている部分があることを指摘している[11]。それは、八橋をはさんだ前後の部分だけに集中しているというのである。田中氏によると、

古活字本では岡崎―赤坂―吉田―二川のあとに八橋の叙述があるが、八橋は岡崎より一つ手前の池鯉鮒の、東北に当る処にあり、大きな錯誤である。寛永整版本では、一応池鯉鮒の次におかれが、（ママ）その後に、

入日の色は赤坂の末はいづくと人問はは、露と答えて岡崎の宿を過ぐれば、程もなく吉田に早くつきにけり。

と地名の順序をとり違えているのである。

としている。しかし、果たしてこの部分の地名の順序はまちがっているのだろうか。

まず、古活字本の本文からみてみると、ここで問題になるのは、「二川」という地名である。田中氏は二川ととっているし、日本古典全書[12]の翻字においても二川となっている。ところが、古典文庫[13]と岩波文庫[14]の古活字本の翻字では、その二川のところは三川となっているのである。そこで近世文藝資料所収の古活字本の影印をみてみると、たしかに「三川」となっており、古写本『竹斎東下』でも「ミかハ」となっている。

次に京から江戸へ向かってのこの辺りの実際の地名の順序と、古活字本と整版本のそれぞれにでてくる地名を出現順に並べてみる。

○実際の順序	○古活字本	○整版本
鳴海	鳴海	鳴海
池鯉鮒	岡崎	池鯉鮒
八橋	赤坂	八橋
岡崎	吉田	赤坂
（藤川）	三川（国名）	岡崎
赤坂	八橋	吉田
（御油）	二川	二川
吉田		
二川		

実際の並び方では吉田の次に二川となる。おそらく日本古典全書の野田壽雄氏や田中氏は、古活字本の「三川」を「二川」の誤りであるととっているのであり、そうとれば、その部分までは一応実際の並び方との間に矛盾はなくなる。ただし、この場合でも、田中氏の指摘にあるように、実際には池鯉鮒と岡崎の間にあるはずの八橋の記事が二川のあとにくることになり、大きな錯誤があることになる。また、八橋のあとにもう一度二川が出てきており、この地名が

重複するということもおかしな点である。

では、「三川」を素直に「三川」ととってみてはどうであろうか。「三川」ととれば、これは宿駅の名前ではなく「三河」という国名だったということになる。そこで次に古活字本の本文をあげ、「三川」を「三川」ととって矛盾なく読めるかどうか検討してみたい。

○さて、げかう道にもなりぬれば、けふの日も、はや暮れはどり、あやしめらるゝ、たびのみち何となるみの、はまちどり、あかつきがたの一声は、たびねの夢やさますらん、しよぎやうむじやうの、かねのこゑ、つみほころぶる、みのりとは、たれおしへてや、しら玉か、何ぞと人の、とひしとき。露とこたへて、おかざきの宿にもはやく、つきにけり、入日の色は、あかさかの、あすの日は、よしだのしゆく、いまぞ三川に、つきにけり

（ここで八橋の記事・省略）

五つ六つ七つ八つはしわたりきて
すゑは九つとをたうみといふ

なを行末は、とをたうみの、わけまよひたる道柴に、おきそふ露の玉手箱、ふた川しゆくを立出て、みちくる女の有りけるに、浜名の橋はいづくぞと、とへどこたへぬきしよく、ぶしほにこそは、見えにけり[15]

記述を追っていくと、鳴海を早朝出発して岡崎に一旦着いている。その後の赤坂・吉田は、「あすの日は」とあることから、実際に旅をしているのではなく明日の道行の先取りをしていることとととれる。そして岡崎に着いたこと、明日は三河の国内の赤坂・吉田を旅することを含めて、いまこそ「三河の国」に着いたのだ。という確認をしているととれば、「三川」はこのままで矛盾しない。

ではどうして、わざわざ明日の道行を先取りしたり三河の国に着いたことを確認したりしなければならないのだろうか。

一つは、八橋の記事を書かなければならないためであろう。八橋の旧跡は池鯉鮒に近いのであるが、岡崎から引き返したとしてもそう不自然ではないのではないか。そのために作者は本来なら鳴海と岡崎の間に来るべき池鯉鮒を省き、岡崎に「はやく」着いたとわざわざことわっているのではないだろうか。またそれと照応するように鳴海を早朝に出発する設定になっている。

もう一つは、八橋の場面で、最後ににらみの介が「すゑは九つとをたうみといふ」という狂歌を詠む設定と関わっているのではないだろうか。つまり、八橋でこの行く末は遠江という歌を詠んでおきながら、その後に三河の国内である赤坂・吉田辺りを旅し続けていることを書くのは都合が悪かったのではないだろうか。そこで、八橋の前で三河の国内の道中を明日の先取りということでまとめて、「今ぞ三川に、つきにけり」と確認しておいたのだと考えられる。その際岡崎辺りで、次の日の道行の先取りをするのは、八橋をこの場所にいれて不自然にならないようにするための配慮であろう。そして実際に八橋でのにらみの介の狂歌の後は、三河の国最後の宿駅である二川から道行が始まり、すぐに遠江の国に入るという設定になっているのである。

以上のように考えれば、この部分にはにらみの介の狂歌を挿入するための古活字本の作者の工夫の跡がうかがわれるのである。別の見方をすれば、実際の地名の並び方を変えてまでつじつまを合わせようとしているのは、『竹斎』のこの東海道下りの道行の部分が実際の旅の経験に即して書かれたというよりも、八橋のような名所での

咄がさきにあって、それらを道行文でつなぐかたちで作られたことを示唆しているのではないかとも考えられるが、ここではその問題については触れない。

では次に整版本での改訂を検討してみる。まず、前に引用した古活字本の本文に該当する整版本の本文を引用する。

▽さて、げかうだうにも、なりぬれば、けふの日も、くれはどり、あやしめらるゝ、たびの道。なにとなるみの、はま干どり。友よぶこゑの、しば〳〵に。かりねのゆめや、さますらん。日もふけ行、かねのこゑ、まよひの雲をうちはらふ。ちりうのしゆくに、けさつきて、しばしはこゝに、やすらひて、けふの日かげも、程なくて、七つのころか、八はしの。さはべに、はやくつきにけり。

（ここで八橋の記事。省略）

五つ六つ七つ八つはしわたりきて

すゑは九つとをたうみといふ

さて、こしかたの跡をみれば、入日のいろは、あかさかの。すゑはいづくと人問はゞ、露とこたへて、をかざきの。しゆくをすぐれば、程もなく、よし田にはやく、つきにけり。こよひは、こゝにかりねして。なを行すゑは、とをたうみ。わけまよひたる、みちしばの。うちちる露の、たまてばこ。ふた川のしゆくを立出て。みちくる女のありけるに。はまなのはしはいづくぞと。とへどこたへぬ、そのきしよくは。ぶしをにこそは、みえにけれ。

ここでは、先に示した地名の対照を見ればわかるとおり、地名を実際の順序どおりに並べ変えようという意図が認められよう。道行に池鯉鮒を詠み込み、その後に順序は間違っているが、赤坂・岡崎・吉田とたどって遠江に入るようにしている。その際、やはり記述がちぐはぐになるので、八橋の後に「こしかたの跡をみれば」といい、遠江に入る前にもう一度「なを行すゑは」という言葉を入れなければならなくなっており、古活字本の記述に較べると整版本の方はかなり混乱したものになっているといえる。

もとの本でかなりすっきりと書かれていたものを、作者自身がわざわざ混乱したかたちに改訂することはないであろう。とすれば、この部分の改訂からみると古活字本の作者と整版本の改訂者とはやはり別の人物であると考える方が自然なのではないだろうか。

また、前に述べたように、近世の初期において既に『竹斎』の作者説が定まっていなかった事を考え合わせてみると、このような整版本での改訂の事情がその一因であったと想像することもできよう。

では次に、以上のような古活字本の作者と整版本の改訂者の問題について、整版本での改訂態度とからめてもう少し具体的にみてみたい。

三

井浦芳信氏は整版本での改訂について、そこに教訓的態度や一般化と敷衍を試みる態度をみとめている。それは例えば、京内参りの北野での連歌の滑稽なやりとりのあとで、

▽連歌にかぎらず。がくだうは、たゞ〳〵、人に物をとひ給へ。とふに、そんはなし。しかも、人に物をとひ給ひてこそは、ま

さしく、三がいのだうしとは、成給ふなり。（以下省略）

という具合に、連歌とは直接関係のない学道論をえんえんと続けているところなどに現れている。

さらに、名古屋での療治の一場面では次のような改訂増補が行われている。

○あまりに、むねんに思ひつゝ、一首のうたをぞ、よみにける

あしなくていかにのぼらんざしきまで

くすしのみちはたつしやなれども

▽たれかよみけん哥に、

かみそりのはよりもうすきゑりをきて

くびのきれぬはふしぎなりけり

をあしなくいかにのぼるぞざしきまで

くすしのみちはたつしやなれども

まことに、ひんは、しよだうのさまたげ。あみだも、ぜに程ひかるゆへなり。

この名古屋の咄では、古活字本では竹斎が詠んだことになっている歌が、「たれか」というように竹斎以外の誰かが詠んだことに変えられ、さらに新しい狂歌が加えられている。ここでも竹斎の咄であったものが敷衍され、貧乏に対する一般論になってしまっており、同時に竹斎から離れていくという傾向も見られる。それは、竹斎という人物に対する興味の薄れといってもいい。そのような例をいくつかあげておく。

1○此竹斎も、一しゆつらねばやとおもひ、いかにも、だびたるこゑをあげて

そこもとにちんぴかうふしめすまひか

わづらひあらばやがてなをさん

▽此ちくさいも、一しゅ

（歌は古活字本に同じ）

2○去程に、ちくさい宿にありあひて、折ふし、冬の事なれば、やぶれかみこに、ぬのうらつけ、帯はもめんのまるくけに、いかにも、ふとく、くけたるを、むすびめうしろに、ひきまはし、はをりは、いかにも、すゝびたる、にしけもんの、むらさきつむぎに、うらつけ、むなひほ、しつかとむすひあげ、

▽ちくさい、宿に有あひて。折ふし冬の事なれば。やぶれかみこに、ぬのうらつけ、おびはもめんの丸くけに。はをりは、いかにも、すゝびたる。むらさきつむぎの、ゑりをさし、のけゑもんにぞ、きなしける。

3○思ひ出したる事ありとて、ふすまぬのこを取りかけて、枕たかくいたさせて、たゞねよ〳〵とてせめかゝる、

▽心えたりといふまゝに。ふすまぬのこを取りかぶせて。たゞねよ〳〵とて、ねさせけり。

1は北野での一場面であり、2、3は名古屋での療治咄の部分であるが、いづれも古活字本の方ではその場面での竹斎の動作や服装などを、滑稽さを強調するかのように細かく描写しているの（「だびたるこゑ」「せめかゝる」など）に対して、整版本の方ではそのような具体的な場面描写を削る傾向にあることは見てのとおりである。同様の改訂がなされている箇所はこれ以外にも多くあり、このような傾向は整版本では顕著なものであるということができる。また、名古屋での療治咄の中には、古活字本では具体的な描写を伴った滑稽咄であったものが、整版本の改訂では単なる梗概だけにされてし

まっているものもある。

このように整版本では、古活字本にあった竹斎の物語という性格を薄める方向の改訂が行われている。またそれと並行して、前述した井浦氏の考証にあるように、竹斎とは直接関わらない教訓や学道論への傾斜や敷衍がみられる。そういった傾向の最たるものが、整版本の京内参りの最後の部分に増補されている黒谷での衆道の一件である。この部分は竹斎とは何の関係もなく、さらに整版本全七十一丁の内十八丁半、全体の約四分の一をしめており、全体の統一を大いに妨げていることは言をまたないであろう。そのことについて、朝倉治彦氏は「竹斎不在」とさえ評しているが[16]、その傾向はこの黒谷の部分だけでなく、整版本での改訂の随所にみられるものなのである。

こうしてみてくると、整版本は古活字本『竹斎』を改訂したというよりも、むしろ、『竹斎』のかたちを借りただけなのではないだろうかという印象さえ受ける。以上のような点からも古活字本と整版本とが同一の人物の手になるものだとは考えられないのである。では次にそのように考えることによって、『竹斎』の読み方がどうなってくるのかということについて考えてみたい。

四

『竹斎』研究には大きく分けて辛辣な諷刺や批判をみとめる立場とそれを認めず滑稽さだけを読みとる二つの立場がある。『竹斎』が一つの柱として、滑稽を旨としていることについては異論はないであろうが、諷刺や批判については意見が分かれている。また、既に述べたように、矢野氏は古写本と比較という方法をとっており、その方法によって『竹斎』の中に批判や諷刺を見いだしている。そこで、ここでは『竹斎』に諷刺や評判があるのかどうかを考えてみるに当たり、まず、矢野氏の考え方を検討することからはいっていくことにする。

矢野氏は、竹斎の江戸見物の部分に重点を置いて古活字本と整版本とを比較しているのだが、その論拠になっているのは次の部分である。[17]

A○おとに聞こえし、日本はし、とゝろ〳〵とうち渡り
　▽をとに聞こえし、日のもとの。はしをみな人わたりかね。世をもたゝずみかねたりし。事のためしも、おほかりし。
B○南にあたりて、ながむれば、天下のあるじ、おはします。
　▽みなみにあたりて、ながむれば。天下のぶしやうの御ざなさる。
C○若君さまと聞えける、はゞかりながらも、一しゅ、よろこびのうたを、ゑいじける
　▽わかぎみさまとぞ聞えける。はゞからず、又一しゅ
（Dは省略）

これが矢野氏が論拠にしている箇所である。Aは日本橋の情景であるが、この部分について矢野氏は、

この一句によって「世をもたゝずみかねたりし、事の例」の典型である竹斎の存在感が一層確固たるものになっていると言えよう。それに対し、古写本の文脈では、日本橋の繁華な様子のみが徒らに目立ってしまっている。

と述べているが、それはどうであろうか。むしろ古活字本の江戸での全体の記述から見れば、この日本橋の記事は非常に簡単なもので

あり、とても「日本橋の繁華な様子のみが徒らにめだってしまっている」ものとは言えないのではないだろうか。次のBでは古活字本の「天下の主」が整版本では「天下の武将」になっている点が、またCでは古活字本での「慶びの歌」が整版本では削られている点が問題になっている。矢野氏自身の言を借りれば、

以上の三例から知られるのは、整版本では徳川氏をこの世の主宰とし、そのことを祝福しようとする発想が、古写本に比べて一歩づつ後退しているという紛れもない事実である。

ということであるが、たしかに、そのようにも読めよう。しかし、それはあくまでも古活字本での徳川氏賛美の記述が後退したに過ぎず、そのことをもってすぐには徳川の治世に対する批判であるとはとれないのではないか。例えば、Bとして引用した部分に続いて次のような箇所がある。

○かさねあげたる、じやうわくは、くもにつらなる、ばかりなり。
▽御しろの見事さよ。金銀るりの玉ぎをはり、かさねあげたる、らうかくは。雲につらなる有さまは、もろこししんのしくわうてい。かんやうきうにも、おとるまじ。

この整版本の改訂は、前田金五郎氏の指摘にあるように、「江戸城を「咸陽宮」にも劣るまじと言うのもオーバーな表現で」[18]はあるが、そのまま受け取れば、ここはやはり徳川氏への賛美の表現であろう。

次のEは『竹斎』の最後の部分であるが、矢野氏はこの部分に対してもっとも大きな重心をおいて論じている。

E○まことに、すぐなる御代の、しるしとかや
くれたけのすぐなる代々にあひぬれば
やぶくすしまでたのもしきかな
▽まことに、すぐなるみよの、しるしとかや。このちくさいも、これほどに。すぐみよ(ママ)に、あひながら人にも、よこざまならずして、こゝろねいなる事もなし、つねに、かゞみのかげを見よ、ゆがめば、かげもゆがみぬべし、かくおもひて、一しゆ
くれ竹のすぐなるみよにあひぬれば
やぶくすしまでたのもしきかな

ここで矢野氏は、整版本での改訂に「人にも横様ならず」「心に佞なる事」のない清廉潔白の士である竹斎であってみれば、これほどの「直なる御世」で成功しないはずはなく、そうならないのは政治が悪いからであるという徳川氏への批判を読み取っている。具体的には整版本で増補された「鏡」という言葉に注目し、

その意味では、竹斎が常に我が心の歪みを省みたという鏡は、政道の正しさを映す「御代の鏡」でもあったわけであり、「御代の鏡」に、知られたくない程に落ちぶれ果てた彼の姿が映るということは、この世の歪み以外の何物も意味しないであろう。

と述べている。しかし、子細に検討してみると、鏡に竹斎の姿が映っているのだととったにしても、そこに映っている竹斎は、この文脈では「人にも横様ならず」「心に佞なる事」のない清廉潔白の士なのであり、「人に知られたくない程に落ちぶれ果てた彼の姿」ととるのはいきすぎではないだろうか。矢野氏はさらに次のように続けている。

宇面の上では、徳川幕藩体制を寿ぐ歌を全面に立てながら、作者がもっとも心を砕いていたのは、その歌が現実性を持たないような舞台装置の設定だったわけであり、そうした発想の根底

に〝直なる御世〟への反発があったのは自明のことであると考えられる。

しかし、「字面の上では」やはりあくまで「徳川幕藩体制を寿ぐ」ものであり、古活字本は勿論のこと、若干の後退はみられるにせよ整版本においても『竹斎』の基調になるものは徳川氏への賛美ではないだろうか。Eのに部分を素直にとれば、徳川氏の治世を「人に知られたくない程に落ちぶれ果てた」「やぶくすし」の竹斎でさえ頼もしく思えるような「すぐなるみよ」と讃えているようにさえ読める。はたして『竹斎』の「発想の根底」には「自明」のごとくに、「〝直なる御世〟への反発」があるのだろうか。その点についてもう少し詳しく検討してみたい。

矢野氏のあげているEの部分は『竹斎』全体の最後にあたる部分であが、それが全体の構成の中で果たしている役割はどのようなものであろうか。Eと対応する『竹斎』の冒頭部分は次のように始まる。

○あめがした、おだやかにして、山もだうぜず、みねの松、たいらかにして、風しづかに、おさまり、国家、よろこびながき時とかや、そのころ、山城の国に、やぶくすしの、ちくさいとて、きやうがる、やせ法師一人あり、

ここには、よく知られているように「まつ、たいら」に徳川氏の本姓である「松平」が、また「よろこびながき時」に年号の「慶長」が読み込まれている。とすれば、型にはまったものではあるが、この部分も徳川氏の治世を寿いでいるということになろう。この冒頭部分は、先にEとして引用した最後の部分の「くれたけのすぐなる代々にあひぬればやぶくすしまでたのもしきかな」と言う寿ぎの歌と首尾照応しているのであり、そのことからこの『竹斎』という作品が大枠として徳川氏賛美の基調を持っていることは明らかなのではないだろうか。

さて、京の都では、

○其身は、ひんくにして、何事も、こゝろにまかせざれば、おのづから、こゝろも、まめならず、はだへ、しやうゑを、かざらねば、やぶくすしとて、人もよばず、

という状態であった竹斎は、東海道を江戸へと下ってくる。そして、江戸に到着したところで次のような腰折れを一首詠む。

○むらさきのゆかりなければむさし野やはてしもしらぬわがおもひぐさ

▽むらさきのゆかりなければむさし野のくさばのかげとよるやどもなし

整版本の改訂では、はるばると見知らぬ土地までやってきた竹斎の心細さがより強くでているが、この後竹斎は、江戸を見物し、そして最後のEの部分となるのである。江戸に着いたときには見知った者もなく心細く思っていた竹斎が、江戸の賑わいを見物した後ではこの治世をたのもしく思う歌を詠むことから考えても、『竹斎』の基調には徳川幕府への賛美の態度が認められよう。

このように『竹斎』という作品そのもののなかには、矢野氏の指摘するような「発想の根底に」あるという「〝直なる御世〟への反発」は認められない。では、矢野氏はそのような発想をどこから得たのであろうか。

五

矢野氏は、先に引用した江戸でのＡＢＣＥの部分の古活字本と整版本との本文異同の検討の後で、

批判の矛先が、将軍を頂点とする社会体制そのものに向けられている以上、それがたやすく表明し得る性質のものでないのは自明のことであり、既に明らかなように、古写本や二種の古活字版では説得力のある形で表現されてはいなかった。

と述べている。整版本にせよ古活字本にせよ『竹斎』には体制批判などといたものはないのではないかという事については既にみてきた。また、これまでにみてきたように作者と改訂者とは別人であると考えるべきである以上、整版本での改訂の傾向の「萌芽」を古活字本にまで遡ってとらえようとするのは無理ではないだろうか。

矢野氏や野間光辰氏のような『竹斎』に諷刺や批判を認める立場の根拠とされるものに、『竹斎療治之評判』があり、そこには次のような記述がある。

さて、蕭京は陽にその人の悪を取出してしかり、この竹斎はうらはらにて陰にしかる心を内にふくみてかき、外はさらりと浮世のはなしにかくなり、能も心得たる人と見えたり

これを見れば、たしかに「陰に」ではあるが批判、つまり「しかる心」を内に秘めていたということになる。そして野間氏も矢野氏も、この部分を根拠にして『竹斎』に批判性を読もうとしているのであろう。つまり、作者の「すこし思ひよりの下心」が、医療批判であり、更には当世の風俗批判であり幕政批判であると、かなり大幅に敷衍してとらえているのである。

この『竹斎療治之評判』は、矢野氏の指摘にもあるように、その中での『竹斎』の引用文から、整版本の方を使っていることがわかっている。だとすれば、『竹斎療治之評判』の『竹斎』解釈は整版本にまでしか遡れないのではないか。別人の手になり整版本とはその本文がかなり違っている古活字本にまでその解釈を適用しようというのは無理な話であろう。

さらに、もし整版本にその解釈を利用するとしても、『竹斎療治之評判』自体は、あくまでも『竹斎』の名古屋での療治咄についてだけの「評判」なのである。また、『竹斎療治之評判』の作者である円瓢子自身が「外はさらりと浮世のはなしにかくなり」と言い、療治に対する批判でさえ「陰に」「内にふくみて」と言っているのであれば、『竹斎』とほぼ同時代の人といってもよい円瓢子でさえ、整版本『竹斎』に表面的には批判性を読み取れなかったということではなかったか。たしかに、「すこし思ひよりの下心」という含みのある表現を使っているのではあるが。それを体制批判というようなところにまで大幅に敷衍してしまうことはできまい。

六

『竹斎』における諷刺や批判の有無について、また古活字本の作者と整版本の改訂者の問題について考えてきた。ここでは矢野氏の論考を検討・批判するかたちでみてきたわけであるが、このような問題は矢野氏だけではなく、これまでなされてきた多くの『竹斎』論にも見られるものなのである。その多くは、古活字本と整版本と

の本文異同の軽視、古活字本の作者と製版本の改訂者の問題の見過ごしによるものと思われる。

実は、このような問題点は、既に述べたように、はやく井浦芳信氏によって提起されていたことなのである。つまり、井浦氏のもたらした成果は、以後の『竹斎』研究において等閑視される傾向にあったといえる。現に、井浦氏によって既に解決されている問題をみすごして、誤った結論をみちびきだしているような論文も見うけられるのである。

井浦氏によって始められたといってよい本文異同への着眼から汲み出される多くの問題点はまだ解決されていないといってよい。本稿では『竹斎』の江戸の部分に注目して考えてきたが、今回触れなかったほかの部分の本文異同にも多くの問題が残されており、『竹斎』を全体として論じるためにはこの残された部分を含めて論じなければならないことは言をまたないであろう。さらに、今回「古活字本」として一括してあつかってきた本文にしても、十行本、十一行本、古写本『竹斎東下』の相互の関係については、現在までのところまだ定見がない状態である。

このように『竹斎』研究における今後の課題は多いが、『竹斎』研究の原点ともいうべき井浦氏の方法にたち戻って、考えてゆく必要があるのではないだろうか。

注

1　特に古活字本を使用していると断わっているものは少ないが、引用されている本文は古活字本のものである場合が多い。整版本によっているものには、冨士昭雄『江戸の笑い』(平成元年刊)「『竹斎』の諧謔性とその系譜」がある。

2　松田修『國語國文』第二十六巻第三号「『竹斎』の成立―假名草子の時好性―」。

3　矢野公和『國語と國文學』昭和五十六年十一月特集号「風化の凝視者―『竹斎』序説―」。

4　『竹斎』には、古活字本に十行本と十一行本とがあり、古写本に『竹斎東下』と題するものがある。この三本の前後関係については諸説あり決定しがたい。本文についてはそれぞれ細かな異同はあるが、ほぼ同じものといってもよいであろう。本稿でとり上げて問題とする箇所についてはこの三本の異同は特に問題にはならないので、ここではこの系統の本文は十一行本を用いることとする。

5　笹野堅「日本古典全書『近世歌謡集』」所収『淋敷座之慰』「医者くどき木やり」の頭注。

6　野間光辰、近世文学会(昭和四十年、鹿児島大学)での発表「藪医竹斎系伝」。後に「鑑賞日本古典文学『御伽草子・仮名草子』」所収『竹斎』の解説。

7　野間氏の紹介する『畠山ㇾ富山系図』による。

8　『竹斎療治之評判』の引用文は、前田金五郎編「近世文藝資料11『竹斎物語集』」所収のものによる。

9　松村博司「名古屋大学『國語と國文学』26一九七〇年七月、上甲幹一先生追悼号」「興がる痩法師」。

10　井浦氏の論拠は、『伊勢物語』第九段の宇津の山で修行者にあう場面を引用した部分での改訂である。古活字本で「伊勢物語りにも書たれ共」という部分を整版本で「なりひらしうに、みえたり」と変えた部分、また、古活字本では単なる見知らぬ人である修行者を整版本で僧正遍照に付会した部分である。この部分は実際には業平集にはなく、また遍照説は『愚見抄』『闕疑抄』で否定されていることを根拠にしている。

11　田中伸『仮名草子の研究』昭和四十九年。

12　野田壽雄校注「日本古典全書『仮名草子集』」昭和三十七年。静嘉堂文庫蔵、古活字十一行本。

13　朝倉治彦「古典文庫『竹斎』[対校本]」昭和三十六年。古活字十一行本。
14　守随憲治校訂「岩波文庫『竹斎』」昭和十七年。古活字十一行本。
15　以下『竹斎』の引用文は「古典文庫『竹斎』[対校本]」による。
　○の下は古活字十一行本、▽の下は寛永整版本の本文。
16　朝倉治彦氏はこの部分について「特に北野に於ける記述に、増補の傾向が集中動揺してゐる。竹斎不在の叙述が甚だしい。」と「竹斎不在」という言葉で評している。（出典は注13に同じ）
17　ＡＢＣＤＥの記号は矢野氏が付しているものである。
18　前田金五郎「日本古典文学大系『仮名草子集』」のこの部分への補注。